

初代東京駐割アメリカ領事チャールズ O. シェパードと 明治3年の襲撃事件について

重 松 優

Charles O. Shepard, the First American Consul in Tokyo, and the “Assassination” Plot in 1870

Yu Shigematsu

Abstract

This essay is a short biography of Charles O. Shepard, the first American diplomat stationed in Tokyo after Meiji Restoration. His autobiography published in 1878 refers to an assassination attempt on his life, but this interesting case has been largely unknown to historians so far. The author suggests a few possible explanations, including Shepard’s precarious political standing. A summary of key essays by Shepard is also included in this paper.

1. はじめに

幕末から明治初年の一時期において、開国と近代化に向かう世相への反発は、一連の不幸な外国人殺傷事件を惹き起こした。薩英戦争につながった生麦事件をはじめ、ヘンリー・ヒュースケンの暗殺、イギリス公使館が置かれた高輪東禅寺の二度にわたる襲撃事件などは、外交交渉の当路者を大いに苦しめた。現代のテロ事件が、直接的な被害以上の大きな政治的影響を持つように、幕末維新期の外国人襲撃事件は、事の次第によって国政も揺るがしかねない問題であった。

さて、調査の過程で真偽不明の資料に行き当たり、それが気になって仕方がないという一種の悪癖は、歴史研究者の間では珍しくないようである。筆者は近代初期の対外関係を研究テーマのひとつとしており、近ごろ、明治初年にアメリカ領事として東京に駐在したチャールズ O. シェパードの自伝『姉の子どもたちのためのクリスマス・ストーリー』（以下、「自伝」と略記）を読む機会があった¹。そこには、1870（明治3）年3月、築地ホテル館で水戸からの暗殺者に襲撃されたとする顛末が図解入りで書かれており、これが事実ならば重大な外交事件である。ところが、一通り調べてみても、資料は大変少なく、管見の限りではこれを取りあげる研究論文もない。

これはいわば、事件にならなかった事件である。歴史の叙述において、著名な事件が中心的な役割を果たすことに疑いは入れないが、このようなアネクドットにこそ、過去の日々の細やかな様子や人々の心情があらわれることがある。シェパード領事については、関係文書を所蔵するニューヨーク州バッファロー市歴史博物館（The Buffalo History Museum）に問い合わせるまでは肖像写真も不明であって、英語と日本語いずれにおいても、事跡をまとめた論文はないようだ。シェパードは未刊の原稿も含めて、少なくない文章を残したけれども、それらはかれの優れた筆力を示すだけでなく、近代外交史上にも興味深い示唆を含んでいる。襲撃事件を紹介する本稿は、かれの小伝の試みでもある。

2. 前半生

ニューヨーク州は、マンハッタン島を含むニューヨーク市を扇の要として、北西に大きく広がっている。1840年、チャールズO. シェパードは、ニューヨーク州の最西部、エリー湖に面するバッファロー市に近い小さな街、アーケードに生まれた。

同名の父は、ニューヨーク州議会の上院議員をつとめる地元の名士であり、また、黒人奴隷の逃走を助ける「地下鉄道」の一員でもあった²。見知らぬ黒人の奴隷たちが家を訪れては、人知れずどこかに去って行く様子を、幼い頃からシェパードは見ている。奴隷制が布かれていない北部でも、逃亡奴隷の援助は非合法活動とされていた。シェパードはのちに、マリア・ルズ (Maria Luz) 号事件に際して、人身売買の被害にあった多数の中国人苦力の解放に関係したけれども、それを父親の存在と結び付けて見る資料がある³。

シェパードは「自伝」に、自分は学生 (student) だったことはなく、生徒 (school-boy) のあとは兵士、士官、そして公僕になったと書いている⁴。かれは元来、勉強が好きな子どもではなかった。寄宿していたトロントの学校から無断で家に戻り、父を落胆させた。そこで父は、シェパードの姉が通っていた新設の女子大学、エルマイラ・カレッジのチャールズ・ファーラー教授に、個人指導を依頼することにした。ファーラー教授はそのころ、住民に寄付を呼びかけて大学に天文台を建築した名物教師だった⁵。シェパードは教授宅に住みこみ、1年間助手として働くかわら、ドイツ語を学んだり、大学の仕事を手伝ったりした。学生と教員に愛されたシェパードは、「私より楽しい時を過ごし、良い友人を得た男の子はいない」と回想している⁶。そして1861年5月、南北戦争の開戦から1か月後、シェパードは募兵に応じてニューヨーク州第21志願歩兵連隊に加わる (図1)。こうした経緯から、かれは正規の大学教育を受ける機会を、ほぼもたなかった。

自らの意思で兵士となったシェパードに対して、父は政治家としての伝手を使って様々な便宜をはかった。翌62年2月、州知事への働きかけの結果、シェパードは少尉に昇進し、ニューヨーク州第82歩兵連隊に移った⁷。この連隊は、州の第2民兵連隊を母体に、アイルランド系住民の多いニューヨーク市バウリー地区から募兵されたもので⁸、一癖も二癖もある部隊であった。配属の初日、シェパードを迎えた隊付の中佐は、以下のように応じたという。(以下、引用は全て筆者訳。)

連隊長は牢屋にぶち込まれていて不在だ。あのクソったれが。(中略) 知事のクソのようなケツが、またこちらに使いものにならんクソったれのバカを1人送ってきたんだな。少尉だと？ いいか、このクソったれのチビ助が、砲身ブラシだってお前に使いこなせるものか！ お前なんぞ要らん、このクソったれが。命令書は知事に返してやれ。それでクソったれの知事に、こちらは人間が間に合っている、知事におかれましてはそのバカな頭に、新しい脳みそをつめこんでみては如何ですかと行ってやれ。あと、ここは保育園じゃないんだとな。ほ乳瓶もないぞ。さあ出て行け。お前は使わん⁹。

連隊長の不在は冗談ではなく、実際に物資横流しの廉で逮捕されていたらしい。困難なはじまりではあったが、シェパードは少々の方便と、持ち前の胆力と機知で、士官として働きはじめる。兵隊たちと上官の信頼を得た過程については、自伝やその他の文章に詳しい。まもなくシェパードは中尉に昇進し、フェアオックスの戦いで戦傷を負う¹⁰。回復後はアルフレッド・サリー將軍の幕僚に任じられた。



図1 1861年にバッファロー市から志願した元兵士たち（右から2人目の小柄な人物がシェパードである。1910年9月1日 Buffalo Evening News 紙掲載。バッファロー市歴史協会提供。）

南北戦争は1865年に終結、シェパードはその後財務省につとめ、69年4月16日、江戸駐在アメリカ領事として任命を受けた。江戸が東京に改称されたのは、前年9月のことだが、欧米の政府は当分のあいだ、旧名の使用を続けていた。シェパードは30歳にも達しておらず、その若さから周囲にも異例の人事と受けとられ、面会者からは秘書か事務官ではないかと折々に誤解されることになる。外交官としての任命も極めて単純で、「パスポートと、公使館規則と、いくらかの未使用の公文書用紙」が渡されて、「未知の世界に投げ出されるように」ひとりで赴任したらしい。渡航には2か月の期間が与えられた¹¹。

3. 事件のあらまし

当時、列強の駐留部隊に守られている横浜の居留地が、日本に在住する欧米人にとっての中心であり、各国の公使館も横浜に置かれていた。開設されたばかりの東京の築地居留地は、いわば出張所と位置づけられる。そこに新設の領事として送りこまれたシェパードは、「エド・ホテル」、今日は築地ホテル館として知られる和洋折衷の館の一室に陣取った。のちにシェパードと親交を結ぶアメリカ人ジャーナリスト、E. H. ハウスは、赴任当初のシェパードについて、このような記事を発表している。

江戸にやってきた合衆国領事（引用者註：シェパード）は、ホテルで最も美しく、面会に訪れた者にとっても最も便利なバルコニーを公的な応接の場所とした。それは、領事の出身地であるニューヨーク州西部の出身者によく見られる、危険に対する不思議なほどの無頓着さの現れであったか、あるいは領事が自分の忍耐力を過信したか、どちらかではなかったかと私は思う。そこは、ホテルのまさに中心であり、遮るものもなく、静けさやプライバシーとは無縁の場所だった。（中略）私が江戸の領事のもと、星条旗の権力と威儀が示される場所に行くたびに、大量のタバコの煙がきれいな輪っかを描いており、領事が非公式の活動にも勤しんでいることが窺えたのである。こうした接待の様子は6か月つき、最終的には、この帰結は狂気が逃亡か、どちらしかないことは明らかだった¹²。

結局、居留地の喧騒を避けるために、シェパードは領事館をタウンゼント・ハリスも滞在した麻布善福寺に移すのだが、その決定には、ホテルで発生した襲撃事件も無関係のように思われぬ。

1870年3月28日（明治3年2月27日）の晩、午前2時頃に事件は起きた。シェパードは、自室の

ドアに、“Foriner piggy”（原文ママ、外国の豚）と脅迫文が貼られたことがあり、表だっては笑い飛ばしていたが、内心は落ち着かず、ベッド脇にカービン銃を置き、枕の下にもピストルを忍ばせ、明かりをつけたまま寝るようにしていた。図2が、「自伝」の71頁に掲載された部屋の図である。シェパードの部屋はホテルの2階にあり、図の最上部がベランダ、その下に控えの間、ベッドルームが続き、居室を廊下が囲んでいる。最下部の小部屋は召使部屋で、図の右側には階下に向かう階段がある。シェパードの詳細な記述通りに事件の顛末を説明すると、以下のようになる。

A: 召し使いに磨かせる靴を置いた場所。侵入者が靴につまずいた音で目を覚ました。

B: シェパードは飛び起きてベッドの後ろのBに立ち、「誰だ?」と訊いた。

C/D: 侵入者は屏風の陰のC、さらに控えの間の入り口、Dに逃げた。シェパードは無意識にピストルを取り出し、あとを追った。

E/F: そしてEにあったステッキ立てにシェパードもつまずき、勢いあまって控え室の入り口、Fに腹ばいになった。

G/H/I: 立ち上がって大廊下のGに来たときには、侵入者はその少し先、Hにいた。ここでピストルを発射したが当たらず、走りながら撃鉄を起こして再射、階段の目の前、Iにいた侵入者に命中した。侵入者は両腕をあげ、叫び声と共に階下に消えた。

J: シェパードがIまで来ると、侵入者は階段の下、Jにあるドアから砂利の敷かれた外に出るところだった。さらにJまで降りたときに、Kにいた警護人たちが物音に気づいた気配があった。このときに初めてシェパードは恐怖を感じ、「一足飛び」に階段をかけあがり、集まってくる多くの提灯に動揺して闇雲にピストルを発射するところだった。そして、顔見知りの警護人を見つけ、緊張の糸が切れたシェパードは失神した。

階段には血痕と短刀一本が残され、足跡から侵入者が海岸から舟でやってきたこと、20人から30人の共犯者がいたことが分かった。そして、事件発生から2時間のうちに、東京府知事や外務卿、その他の日本人高官が現場に現れた。翌日の昼には、急報を受けたチャールズ・デロング駐日アメリカ公使も、軍艦アシュエロット号に乗船して築地居留地に到着し、ホテルには厳戒態勢が敷かれた。警護人も50人に増員された。

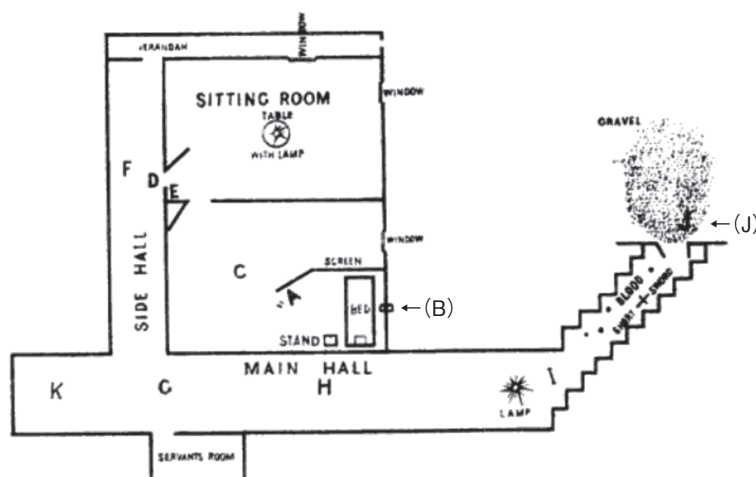


図2 部屋の図（*Christmas Stories for My Sister's Children*, 71頁）（ ）内は筆者補。

居留地の新聞は、事件に際してシェパードを「友好的な性格を持ち、常に親切かつ立派な態度で日本人とふれあうことで広く尊敬されている」外交官として賞賛したが¹³、「自伝」には日本人への不信が率直に綴られている。日本側は市中の木戸を閉じて、各戸毎に犯人を捜すと言明したけれども、シェパードにはそれが実際に行われたようには思えなかった。また、敷地内でシェパードの部屋への合い鍵が見つかり、使用人か警護人の関与が強く疑われた。悪夢に繰り返し襲われるようになったシェパードは、眠りにつくことにも恐怖を覚えるようになった。

それから数週間、容疑者として10名ほどが次々と引き出されたが、別の罪に問われている死刑囚が、「一石二鳥」として犠牲に供されているようだった。結局、自分を騙すような茶番はやめてほしい、とシェパードは日本側に伝え、事件はそのまま迷宮入りしたのである。シェパードの「自伝」では、犯人たちが水戸から来たことを数か月後に知ったと記すが、情報をもたらされた詳しい経緯は不明である。事件の背景として、旧幕府の関係者が居留地の外国人を最も憎んでいて、外国人排斥の陰謀の噂が流れていたともシェパードは書いており、こうした認識から犯人の素性が類推されたのかもしれない。

4. その後

なぜ、外交官の暗殺未遂事件が、広く伝えられなかったのかは、本件にまつわる大きな謎である。前年9月には、酒に酔った熊本藩士が偶然通りかかったイギリス公使に対して抜刀した騒動、イギリス公使館に出入りしていた日本人の床屋が、3人の二本差しの男に追いかけられ、持ち運んでいた傘を両断されたが辛くも逃げ切った事件が連続して発生した。これらのイギリス人外交官に関する傷害未遂事件は、比較的軽微でありながら、『大日本外交文書』にも関係資料の所載がある¹⁴。

一方、シェパード領事襲撃事件については、駐日アメリカ公使館の関係文書に調査の及んだ範囲では言及がなく¹⁵、日本の公文書アーカイブとして最も浩瀚なアジア歴史資料センターのデータベースにも資料が見つからない。事件に論及する一次資料は、わずかにシェパード自身の「自伝」と、居留地の新聞2紙に報じられた短信のみ¹⁶、誠に不思議という他はない。この問題について筆者は、事件が起きた当初から、シェパードをはじめ関係者たちが本件を大ごとにしないう、抑制的な姿勢をとっていたのではないかと考える。

まず、先にも触れた通り、シェパードは日本人に同情的なタイプの外交官だったことがある。日本語も日常会話ができるほどには修得し、これは当時の外交官としては珍しく、その結果、日本人の個人的な友人も多かった。日本人はかれを「シェパさん」と呼んでいたらしい¹⁷。外交文書を見ても、日本人に対して高圧的な態度をとる様子は見受けられず、外交官としてのシェパードの姿勢は、友誼と交渉をベースに妥協点を見出すことを主眼としたように思われる。

また、この時期のアメリカ公使館文書を見ると、1月に起きたアメリカの軍艦、オネイダ号の沈没事件にまつわる書類が大変多い。水兵100名以上が溺死した大惨事であり、オネイダ号と衝突して沈没の原因をつくったイギリス船籍の商船の責任も、外交問題となっていた。このような情勢下で、実は物盗りであったかもしれない一事件について騒ぎ続けることは、着任したばかりのシェパードにとって、得策に思われなかったのではないだろうか。シェパードは、当時の自分の立場が弱かったことを、「自伝」に次のように書いている。(同書のタイトル『姉の子どもたちのためのクリスマス・ストーリー』からも明らかなように、文章の一部は子どもたちに語りかけるように書かれた。)

(引用者注：襲撃事件のあと)なぜ叔父さんが横浜に移らなかったのか、きみたちは不思議に思うかも知れない。横浜に居たアメリカ公使はそれを望んでいた。しかし、私は江戸の領事として任命を受けたのだから、横浜に行けば任地を放棄したとして懲罰を受けることも考えられた。個人としての評判も大事だったけれども、父と一族の名誉と評判も肩にかかっていたから、臆病者と指さされるくらいなら、ここで死んだ方がましだと考えた。別の任用も全く期待できなかつたし、政治上の敵からはあらゆる攻撃を受けて、仕事から逃げたという烙印が一生つきまとうことになる。矛盾する言い回しをわかってくれるだろうが、一族皆を不名誉にさらすことはできないほど、叔父さんは臆病者だったんだ。このことは神様に感謝している¹⁸。(下線引用者)

職業的外交官ではないシェパードは、政治的な後押しをうけて領事となったはずだが、着任後の安泰は約束されていなかった。10年前に少尉に任官したときと同様、自らの手で居場所をつくらざるを得ず、開設されたばかりの新しい居留地では、自ずと慎重な振る舞いも必要だったのではないか。

これ以上の考察は、新資料の発見を待って行いたい。事件後のシェパードについて筆を戻すと、事件後の6月から7月にかけて領事館移転について日本政府に打診があり¹⁹、秋にはシェパードは麻布善福寺に引き移った。このときから、前述のジャーナリスト E. H. ハウスと、広沢真臣の子健三と同居をはじめ、このことは別の拙論にすでにまとめた通りである²⁰。翌71年4月、前任者レミュエル・ライオンの急死と前後して神奈川(横浜)駐割領事に転任、デロング公使の不在中は代理公使も務めた。日本での勤務は73年11月に終了する。75年3月にはイギリス中部リーズ市に領事として赴任、77年6月には近隣のブラッドフォード市に配置換えとなり、1882年までその任にあった。その後、ニューヨーク州バース市の退役軍人向け居住施設の責任者、チョクトー族居住地委員会の委員長などの任にあった²¹。

シェパードは南北戦争での従軍歴と日本での経験の記述を中心に、少なくない数の文章を残した。いまだ確認できないものもあるが²²、主要資料は発表年順に以下の通りである。

1. Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children—Personal Reminiscences of a Not Uneventful Life* (『姉の子どもたちへのクリスマス・ストーリー—色々ななかったわけでもない人生の個人的回想』), *Entre Nous*, 1878年。本稿で「自伝」と呼ぶもの。

2. Captain Musgrave Davis [Charles O. Shepard], “In a Bowley Regiment (バワリー連隊にて),” *McClure's Magazine*, Vol. 8, 1897年1月号, 245-254頁。「自伝」所載の経験談に、若干の変更を加えたもの。Captain Musgrave Davis 名義。

3. Charles O. Shepard, “Cheesai Willie San (小さいウィリーさん),” *The Saturday Evening Post*, Vol. 173, 1900年7月28日号。1870年の汽船シティー・オブ・エド号の沈没で父を亡くした男の子が、当時流行した愛玩用ウサギの売買で学資を得て、アメリカに戻る成功譚。Captain Musgrave Davis 名義で、*Sturm's Oklahoma Magazine* 1906年8月号にも転載されている²³。

4. Charles O. Shepard, “‘Knight of the Portuguese Military Order of Our Lady of the Conception of Villa Vicosa,’ and Why (ヴィラビコサの聖母マリアポルトガル軍団勲章がなぜここにあるのか),” *Buffalo Historical Society Publications*, Vol. 25, 1921年, 45-52頁。マリア・ルズ号事件での功績により、奴隸船が発船したマカオを領有するポルトガル王から勲章授与に至った経緯を詳述。

5. Charles O. Shepard, “Wong Chin Foo—The Story of a Chair (王清福—ある椅子の話),” *Buffalo Historical Society Publications*, Vol. 25, 1921年, 52-55頁。日本での勤務時に支援を差し伸べた中国人の政治活動家、王清福との思い出を語るもの。

6. Charles O. Shepard, “Unpublished Manuscript” in Charles O. Shepard Papers (Mss. A00-335), Buffalo Historical Society。シェパードが欧米外交官としてはじめて明治天皇と立礼で謁見するにいたった経緯、乃木希典の殉死を受けて書かれた「ハラキリ考」など、数件の日本関係の原稿が含まれている。

シェパードは19世紀を生き抜き(図3)、1928年12月13日、カリフォルニア州パサデナ市の自宅で死去した。享年88歳であった。翌日のニューヨークタイムズ紙も、「有名なバワリー連隊」を指揮した元外交官としてシェパードの死を報じた²⁴。かれの墓は一族の出身地、アーケードの公共墓地に現存するようである²⁵。南北戦争への従軍歴があり、この時期に日本に住居したアメリカ人には、冒険的人物として知られたチャールズ・ルジャンドル将軍があり、フィクションも対象にして良いのなら、映画「ラストサムライ」でトム・クルーズが演じたオルグレン大尉が思い当たる。本稿をまとめるにあたって、時折、シェパードのイメージが筆者の心のうちでトム・クルーズと重なったが、シェパードの活躍と率直な人柄は、現実よりも映画にふさわしいように思われた。

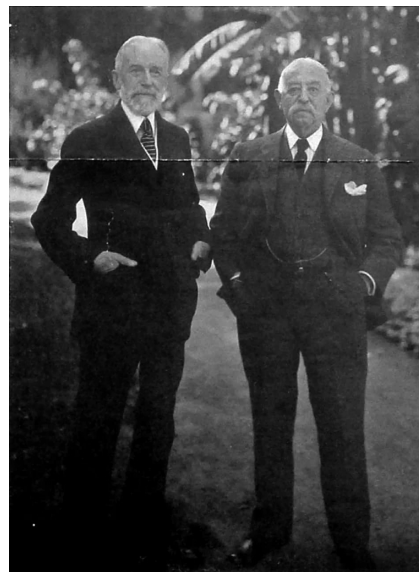


図3 晩年のチャールズO.シェパード(右)。(左はサタデーブニングポスト誌の発行人、サイラスH.K.カーティス。California Life誌1925年12月1日号掲載。バッファロー市歴史協会提供)

【付 記】

本稿の資料の読解には、平成30年度、令和元年度の3年ゼミ生(英語コミュニケーション学科・重松ゼミ)が参加した。また、資料提供で大変便宜をはかってくださったバッファロー市歴史協会にも、この場でお礼を申し上げます。

- 1 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children—Personal Reminiscences of a Not Uneventful Life*, Entre Nous, 1878年。
- 2 Eber M. Pettit, *Sketches in the History of the Underground R. R.*, W. McKinstry & Son, 1879年, 75-79頁。
- 3 Wendy Straight, “Charles O. Shepard,” 1800s Antislavery Activists, <https://orbitist.space/ugrr/content/shepard> (2020年1月閲覧)。
- 4 前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 5頁。
- 5 “Elmira College Observatory telescope created a buzz,” *Star Gazette*, 2017年3月16日付 <https://www.stargazette.com/story/news/2017/03/16/elmira-college-observatory-telescope-created-buzz/99216342/> (2020年1月閲覧)。
- 6 前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 19-20頁。
- 7 前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 32-33頁。シェパードの履歴については、4節に掲げた Charles O. Shepard, “Wong Chin Foo,” 55頁も詳しい。

- 8 前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 35 頁。また, <https://dmna.ny.gov/historic/reghist/civil/infantry/82ndInf/82ndInfMain.htm> (2020 年 1 月閲覧)。
- 9 Captain Musgrave Davis [Charles O. Shepard], "In a Bowley Regiment," *McClure's Magazine*, Vol. 8, 1897 年 1 月号, 246 頁。
- 10 このとき手術を行った軍医トーマス・アンチセルは、後に日本政府の御雇い外国人となるが、その過程で駐日代理公使となっていたシェパードが援助をさしのべた経緯が、前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 60-63 頁に記載されている。
- 11 "Correspondences," *The American Foreign Service Journal*, Vol. IV, No. 9, 1927 年 9 月号, 290 頁。
- 12 E. H. House, "A Japanese Statesman at Home," *Harper's New Monthly Magazine*, Vol. 44, No. 262, 1872 年 3 月号。
- 13 "News of the Week," *The Japan Weekly Mail*, 1870 年 4 月 2 日, 128 頁。
- 14 外務省調査部編『大日本外交文書』第 2 巻第 2 冊, 日本国際協会, 510-513, 583-584 頁。
- 15 米国国立公文書館 (NARA) 所蔵マイクロフィルムより Notes From the Japanese Legation in the United States to the Department of State, 1858-1906 (M-163), Despatches From US Ministers to Japan, 1855-1906 (M-133), Despatches From U. S. Consuls in Kanagawa, Japan, 1861-1897 (M-135) を参照した。
- 16 前出 "News of the Week" および *The Hiogo News* 1870 年 4 月 6 日号, 110 頁。
- 17 前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 134 頁。後年, ローマのホテルで, シェパードと偶然再会した旧知の日本人外交官は, "Shepa-son disca?" (原文ママ, シェパさんですか?) と驚いた。日本語で談笑する様子を見たホテルの客に, 日本人より日本語が上手だといわれて, シェパードは滞在中, 大きな顔ができたらしい。このほか「自伝」には, 最初期の日本語学習にまつわるエピソードがいくつか見られる。
- 18 前出 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children*, 74 頁。
- 19 1870 年 6 月 12 日 (明治 3 年 5 月 14 日) 付 A. L. C. ポートマン宛外務大少丞書翰および 1870 年 7 月 8 日 (明治 3 年 6 月 10 日) 付 A. L. C. ポートマン宛外務大少丞書翰。米国公文書館所蔵マイクロフィルム, Selected Records of the US Legation in Japan (T400), R20。
- 20 重松優, 「広沢真臣の子, 健三のアメリカ留学について」, 『学苑』930 号, 2018 年 4 月号, 65-72 頁。
- 21 Letter from William Loeb Jr. to E. A. Hitchcock (1904 年 3 月 7 日付), Papers of Ethan Allen Hitchcock, 1835-1909, National Archives Identifier 7269046, US National Archives。チョクトー族居留地委員会の職は, 郷党の後輩であるセオドア・ルーズベルトに周旋して得たものであった。ルーズベルトはニューヨークの共和党で頭角を現し, 1901 年に大統領に就任していた。
- 22 前出 11 によると雑誌 *The Japan Magazine* 1927 年 7 月号に, 日本赴任の記録を寄稿したそうだが未見。
- 23 Oklahoma State University Digital Collection, <https://dc.library.okstate.edu/digital/collection/EOS/id/2562> (2020 年 1 月閲覧)。
- 24 "Col. Charles O. Shepard," *New York Times*, 1928 年 12 月 14 日号, 26 頁。
- 25 Charles Otis Shepard, Find A Grave, <https://www.findagrave.com/memorial/25558961/charles-otis-shepard> (2020 年 1 月閲覧) によると, シェパードの墓は Arcade Rural Cemetery の Section 8 Lot 218 にある。前出 24 のニューヨークタイムズが報じたシェパードの命日は 12 月 13 日だが, このサイトは 12 日としている。

(しげまつ ゆう 英語コミュニケーション学科)